



兵法書 ③ (尉繚子の兵法)

2月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年2月20日(月)

「尉」は姓、「繚」はその名、戦国時代の兵法家であり、〈尉繚子〉の著者である。

戦国時代の末期、魏の大梁の出身の「尉繚」という人物が秦にやってきて、「秦王政」に説いた。

「お国の強大さからすれば、他国はたかだか郡県程度の存在です。ただ警戒すべきは、諸侯が合従して秦の不意を突くことです。この際、諸侯の重臣に惜しみなく金をばらまき、彼等の足並を乱してしまうのが上策です」。秦王政はこの策を採用し、成功した秦は更に巨大となった。

それからというもの、秦王は尉繚に会う時は対等の礼をとり、衣服、食事も同じものにした。

だが尉繚は、「秦王は鷹鼻で、目が細く、胸は鷹のように突き出て、声音は狼にそっくりだ。どう見ても人間らしい心の持ち主ではない。一時は甘んじて人の風下に立つが、いつ変わるとも限らない。いつまでも付き合える相手ではない」。

こう思って秦を立ち去ろうとした。

秦王はいち早くこれを察知して引き止めにかかり、宰相に次ぐ要職に就けた。

こうして尉繚の策は秦に生かされ、「李斯」の手で実行に移され、始皇帝による天下の統一に貢献した。

今に伝わる〈尉繚子〉は、天官篇に始まって、前半の政治、経済、兵法など十二篇と後半の軍の管理、統制など十二篇の二十四篇から成っている。

政治の安定が先決であり、法制を確立し、兵士の戦意を重視し、綿密な作戦計画を立て、軍法を厳しく執行し、先手を取って主導権を握るという、思想の上では、法制の確立を説き、信賞必罰を唱え、法家思想の強い影響が見られる。

東京都の出身で、28年間も京都府知事を務めた蜷川虎三氏が、「議会では、尉繚子の言葉を何度も使って答弁し、相手を煙に巻いたものですよ」という話が残っている。

参考：(司馬遷史記、秦始皇本紀、徳間書店)